『道徳の時間(中学校)「偉人の生き方に学ぶ」』
～西郷隆盛の生き方を巡って、人生のモデルを見つける試み～

本田　　実

１．はじめに

平成２５年３月まで星稜高等学校に勤務していた。その間２７クラスの担任を務めた。

クラス経営に限っていえば個人面談があり、保護者懇談会がある。多くの生徒や保護者と話をする機会を得たわけであるが、大半は生活と進路の話になる。そこで私自身、年々感じてきたことは、生徒の将来への目標があいまいになっているということである。１年生を担当し、３年生まで持ち上がり、また１年生へ戻ってくる。その１年生は卒業した３年生が１年生だった時より、さらに目標も展望もないように感じることの繰り返しである。もっとも、明確な展望を持つ生徒は、そういるものではないかもしれないが、彼らの答え方がよりあいまいで、目標を考えること自体面倒というふうに感じられるようになってきた。

「なぜなのか」。「人間の生き方として自分はそれでいいのか」「若者らしさはこういう生き方なのか」ということを核として、授業で、ホームルームで、掃除の時間に、個人面談で、さまざまな機会をとらえて語り続ける以外なかった。そういうことを繰り返しながら「なぜなのか」という疑問に対して、「生徒自身にあこがれる人間像」がないのではないかということを思い始めた。

こういう人間になりたい、こういう仕事に携わりたい。漠然としたものはあってももう一歩進めて、「この人のようになりたい」「この人のような仕事をしたい」というモデル、目標。そのモデルやあこがれが鮮明であるほど、自分の生き方を振り返りつつ、努力する意欲の源泉となり、自分の生き方に少なからず影響を与えてくれるはずである。

さて、平成２５年４月から金沢星稜大学において、教職教科「道徳教育の研究（中等）」を担当するに当たり、これまで模索していた方法をもとに中学校を対象として実践することとした。

その一つは歴史上の偉人を素材として、人物の偉業は言うまでもないが、むしろ短所や挫折等に光を当て、その生き方をより鮮明にすることで人間の生き方を考えるきっかけにするところにねらいをおく方法である。本来ならもっと低年齢のうちに「偉人の伝記」を多く読む機会を持つことが大切なのだと以前から考えていたが、中学生でも実践できると思っている。小学生などに読み聞かせの試みも行われているが、それはもっと低年齢の時代に行うことであって、自力で文字が読めるのであれば、受け身の姿勢・時代を打破する意欲を持たせなければならない。橋本佐内や頼山陽のように『稚心を去り』、『歴史に名を残す』ほどまで目覚めろというつもりはないが、「自分の意志で読む」、それも「伝記」を読む。その中から必ず自分のあこがれの人物像・理想の人間像が見つかるはずである。

今一つは明確な結論に至らなくても、ひとつのテーマを哲学するものである。たとえば、「公共のマナーを考える」にしても切り口はさまざまある。「駅や電車内の迷惑ランキング表」を参考に徹底的に討論する。展開する中で、視点はどんどん発展していく。とにかく徹底的に考え抜くことに重点を置き、道徳的・倫理的な視点をはずさないという方法である。これは討論を中庸に誘導する教師の力量が問われる。

ここでは、「偉人の生き方に学ぶ」試みの実践内容と、そこから得た今後の課題及び可能性についてまとめてみた。

２．「学習指導案」の作成にあたって

「偉人の生き方に学ぶ」形式の道徳の授業は、全国の小・中学校でも実践している。授業の進め方や準備、またその人物のどこに焦点をあてるかなどは、教師のそれぞれの価値観や学校の方針・クラスの求める目標などによってさまざまと考えられる。

文部科学省による「読み物資料集」の中にも、小学校では「岩崎弥太郎・小川笙船・山川健次郎」など。また中学校では「緒方洪庵・石井筆子・加納治五郎」などを扱っている。いろいろな偉人を教材としているが、内容的には挫折と成功をセットにした構成である。実際の授業では成功の方に焦点を当てがちになる。その目的は「目標に向かって努力を重ねよう」という道徳的心情を育むところにあるといえる。しかし、成功に光を当てすぎると、生徒にとって偉人はやはり「特別の人」になってしまう恐れがある。せっかくの教材が生徒の「生き方」に反映させることが難しくなると思われる。そこで当然歴史的業績の大きさはいうまでもないが、「挫折」や「短所」に焦点を当て、そこを起点とした「人間力」に注目した授業を計画・実施することで、生徒に人間としての生き方をより深く見つめさせることを目的とした。

今回、指導案のねらいにふさわしい人物は多くいる中で、高峰譲吉など地元石川の偉人も考えたが、生徒たちが誰でも知っている人物の方が授業に導入しやすいかとも思い、西郷隆盛を選んだ。対象は本学の併設校の星稜中学校の生徒とした。学年は１年生と２年生各１クラスずつで実施した。時期的には６月はじめということも考慮し、特に１年生を意識して今後の目標、将来の目標をもつことにつながる内容を選ぶこととした。

以下、その指導案を掲載する。

星稜中学校	第１・２学年Ａ・Ｂ組	道 徳 学 習 指 導 案 １	
平成２５年　６月　４日（火）	第３校時	２Ｂ教室	【指導者　本田　実　】
平成２５年　６月　５日（水）	第４校時	１Ａ教室	【指導者　本田　実　】
展開の大要	（２年Ｂ組　31 名）	（１年Ａ組　29 名）	
「西郷隆盛の生き方を巡って」（１）			
授業の目標	西郷隆盛の偉業のみならず短所や挫折等について知り、 西郷の「生き方」を考える土台を固める		

学　習　活　動	配布資料	指導・援助の留意点
1　＜導入＞ 前もって 「生き方ノート」 及び①②③の資料 を配布しておく ①②③は第一部と して一冊にした	「生き方ノート」 西郷隆盛（第一部） ①「西郷隆盛」の生い立ち ②西郷隆盛の流罪 ③西郷南洲翁遺訓の現代語版 （１９～４１）	「生き方ノート」は教師が作成 ①・②は伝記等を参考に、教師 ができるだけ易しく作り直した ＊業後に感想文の提出を前提 とする ＊隆盛の一生・時代背景等を ふまえていることを確認。
学　習　活　動	主な発問と活動・予想される反応	指導・援助の留意点
2　＜展開＞ ①「西郷隆盛」の 物語を音読	＊読み誤り、意味のむずかしい言葉 に注意をはらう	段落ごとに指名読み あれば説明
②**【発問１】** ＊西郷隆盛につい てどんなことを知 っているか		生徒指名 ＊生徒の答えを板書
③西郷隆盛の少年 時代から幕末･明治 にかけての活躍		生徒の答えを補足しながら 隆盛の光の部分を確認する
④西郷隆盛の流罪 「奄美大島での生 活を指名読み	＊読み誤り、意味のむずかしい言葉 に注意をはらう	段落ごとに指名読み 心にひっかかる部分に傍線 を引きながら聴く 無実の罪で島流しになった
⑤西郷隆盛の流罪 「奄美大島での生活」 についての読後感	＊どの部分に傍線を引いたか	どういうことを感じて傍線を 引いたのかを尋ねる 生徒指名　発表
⑥西郷隆盛の流罪 「沖永良部島での 生活」を指名読み	＊読み誤り、意味のむずかしい言葉 に注意をはらう	段落ごとに指名読み 心にひっかかる部分に傍線 を引きながら、聴く 無実の罪で島流しになった
⑤西郷隆盛の流罪 「沖永良部島での 生活」についての 読後感	＊どの部分に傍線を引いたか 自分の感想をもとに グループで話し合う	どういうことを感じて傍線を 引いたのかを尋ねる グループ代表生徒のまとめ 発表する
3　＜まとめ＞ ⑥「生き方ノート」 のまとめ	「考えてみよう１（西郷はどうして何年もの沖永良部島への遠島に耐えることができたのか）」をまとめておく 「考えてみよう２(西郷は遠島の間にどういうことを学んだのだろう)」をまとめておく ＊この時間の感想をまとめて翌日提出する ＊次の時間までに「考えてみよう３」の自分の好きな言葉を　書いておく	

【評価の観点】
西郷隆盛の幕末から明治における活躍というレベルの知識から脱却して、偉人として評価されるところへ至るまでの生い立ちや挫折を知ることで、人間の「生き方」を考えるきっかけになったか。

星稜中学校　第１・２学年Ａ・Ｂ組		**道　徳　学　習　指　導　案　２**	
平成２５年　６月１１日（火）	第３校時	２Ｂ教室	【指導者　本田　実　】
平成２５年　６月１２日（水）	第４校時	１Ａ教室	【指導者　本田　実　】

展開の大要	（２年Ｂ組　31名）	（1年Ａ組　29名）
「西郷隆盛の生き方を巡って」（２）		
授業の目標	西郷隆盛が過酷な運命の中で、どうして耐え抜くことができたのかを知ることで、生きる上で大切なものは何かを考える	
学　習　活　動	配布資料	指導・援助の留意点
１　＜導入＞ 利用する配布物 提出感想文の評価	③西郷南洲翁遺訓の現代語版 （１９～４１）	隆盛の一生・時代背景等をふまえていることを確認。 生徒各自の共通点や視点の違う作品を２～３紹介
学　習　活　動	主な発問と活動・予想される反応	指導・援助の留意点
２　＜展開＞ 【発問１】 ①「考えてみよう１」 ＊読書について 【発問２】 【発問３】 ②「考えてみよう２」 【発問４】 ③「考えてみよう３」 【発問５】	グループ討議 **隆盛は無実の何年もの島流しに、どうして耐えられたのか** **多くの考えを引き出す** 冊子（第一部Ｐ４）を開く 西郷は多くの書物から、どういうことを学び取ったのだろう グループ討議 **隆盛はそこで何を学んだのか** **多くの考えを引き出す** 自分の好きな言葉は何か 冊子にある「西郷南洲翁遺訓」の中で、最も印象に残ったものはどれか	２年生は前時の感想から １年生は①からだが、感想文を参考に振り返る ４～５名のグループに分かれて、それぞれの考えを出し合う。代表者のよる発表。 **（本＝読書）** **生徒指名** ＊生徒の考えを板書 （下表参照） 西郷が遠島になった時にどんな書を読んでいたか＝論語など、 沖永良部島においては約八百冊に及ぶことを確認させる 《ヒント》として板書 ・人として（　　） ・世の中の（　　） ・礼（　） **生徒指名** ＊生徒の考えを板書 （下表参照） 4～5名のグループに分かれて、それぞれの考えを出し合う。代表者のよる発表。 **（平素からの行いの積み重ね）** **＊生徒の考えを板書** 生徒指名 その理由を尋ねる 生徒に挙手させる **番号ごとに人数確認《板書》** それぞれ代表１名に理由を聞く

【評価の観点】
挫折の中での西郷の生き方をもとに、どういう生き方が人生を分けるかを考える

きっかけになったか。
人生で大切なものは何かを考えることができたか

＊自分の好きな言葉を次の時間の内容につなぐ
＊「西郷南洲翁遺訓」の印象に残ったものを次の時間の内容につなぐ
＊次の時間までに「西郷南洲翁遺訓」を読んで、印象に残ったものを選ぶ。
その理由を尋ねることを予告する。

星稜中学校　第１・２学年Ａ・Ｂ組		道徳学習指導案３
平成２５年　６月１８日（火）　第３校時	２Ｂ教室	【指導者　本田　実】
平成２５年　６月１９日（水）　第４校時	１Ａ教室	【指導者　本田　実】

展開の大要	（２年Ｂ組　31名）	（1年Ａ組　29名）
「西郷隆盛の生き方を巡って」（３）		
授業の目標	西郷隆盛の偉業のみならず短所や挫折等、生き方を巡って、人生のモデルを見つける	
学習活動	配布資料	指導・援助の留意点
１　＜導入＞ 前もって④⑤⑥に関する資料を配布しておく ④⑤⑥は第二部として一冊にした	④西郷隆盛の人柄を語る「西郷南洲翁遺訓」（現代語版） ⑤西郷隆盛の人柄エピソード 【参考】 ⑥西南戦争の発端から結末まで	＊業後に感想文の提出を前提とする 隆盛の一生・時代背景等をふまえていることを確認
学習活動	主な発問と予想される反応	指導・援助の留意点
２　＜展開＞ 前時の【発問５】 前時の【発問５】	「西郷南洲翁遺訓」（現代語版）の読み合わせ ・「西郷南洲翁遺訓」の中で、もっとも印象に残ったものを挙げる ・それぞれどういう点が印象に残ったのか	抜粋したものを、さらにわかりやすく現代語訳してまとめる 印象に残ったものの番号と人数を板書　《挙手》 生徒指名
【発問１】 西郷隆盛の「人柄エピソード」の、どの場面や様子が印象に残ったか	グループ討議	4～5名のグループに分かれて、それぞれの考えを出し合う。　代表者のよる発表。
【発問２】 西郷隆盛の「人柄エピソード」の行動と「西郷南洲翁遺訓」を重ね合わせてみよう そこからどういうことを感じることができるか	グループ討議 多くの考えを引き出す	板書は簡潔に
３　＜まとめ＞ ＊隆盛は自分の中心にある言葉に違わない生き方をしようとしていたことに気づけたか ＊好きな言葉に自分の生き方がふさわしいものとなることの意味が理解できたか 【評価の観点】 言葉に違わない生き方をしようとする姿勢が見られる、あるいは子どもの口から発		

せられるようになったか。
隆盛の生き方や言葉から、自分を律したり考えたりする姿勢が表れたか。

３．授業実践①【第１時間目・２年Ｂ組】

授業前日に「西郷隆盛（第一部）」の手作り冊子を配布し、前もって読んでおくように指示した。その内容は西郷の少年時代を中心にまとめた部分と流罪となった奄美大島・沖永良部島での生活についてまとめた部分と西郷南洲翁遺訓の抜粋である。

西郷南洲翁遺訓の抜粋は第２時間目での目標に見合うものを七つ挙げ、できる限り平易な現代語訳を試みた。

また、「生き方ノート」と表題をつけて各時間での発問を中心に、それぞれの生徒が考えて最終的に全体の目標にたどりつくよう、順序立てて「考えてみよう」を配置し準備した。

（１）授業の展開から

（ア）【導入】

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
①　「西郷隆盛（第一部）」の冊子を全員が目を通してきているかを確認した ②　「西郷隆盛（第一部）」の冊子を読む以前から西郷隆盛の名前を知っていたかを尋ねた ③西郷隆盛はいつの時代の人か ④江戸時代の初め・中ごろ・終わり？ ⑤西郷隆盛はどこの藩の人か ⑥薩摩藩は今の何県か	（全員挙手） （全員挙手） 生徒Ａ：江戸時代 生徒Ａ：終わりごろ 生徒Ｂ：薩摩藩 生徒Ｂ：・・・・沖縄県 ＊他生徒に軽い反応 間違ったことでクラスの雰囲気が少しやわらいだ ＊少し間をおいて「鹿児島県」の答えが出た

☆ここまでは事前に配布した冊子を読んでも読まなくても、彼らがもっている知識内で確認できる

（イ）【展開】

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
①【発問１】西郷隆盛について知っていること ＊冊子には隆盛の少年時代までのことは載せてあるが、どんな偉業を成したかについては触れていない ＊生徒が小学校で、また２年生は１年生までの間に、隆盛についてどの程度の知識を得ているかがわかる	生徒２～３名に尋ねたが、具体的な答えは出なかった

ほとんどの生徒は名前程度か、導入部止まりである。ただ、この時間の終わりに感想文を書いて翌日提出させたが、１名かなりの知識をもっている生徒がいた。西郷隆盛が好きでインターネットなどでよく調べていると、その中に書かれていた。

自分の思いこんだ判断で、生徒の興味・関心を視野に入れない基本的な見落としの好例になってしまった。

また、１年生の中で１名、小学校で「時代を変えた人々」という課題での授業を受け、その時西郷隆盛の名前を知った。しかし、この時間で聞いたことは知らなかったという内容の感想文があった。『２．「学習指導案」の作成にあたって』の項で、「偉人の生き方に学ぶ」形式の道徳の授業は全国の小・中学校のいくつかで実践しているが、授業の進め方等は教師のそれぞれの価値観やクラスの求める方針などによってさまざまである」と述べてきたが、その一例であろうと思われる。

その生徒は続けて「私は西郷隆盛は特別の人間だと思っていた」と書いている。「特別な人間」と印象付けてしまうことは、道徳教育だけに限らず生徒たちの向上心や成長を促す点で意味をなさなくなってしまう。今回の授業において最も意識し配慮した部分である。さらに、「小学校で少し習った西郷は、私にとってあまり良い印象ではありませんでした」というものもあった。この感想には、どういう話をしたのだろうと首をかしげてしまう。

②西郷の幕末から明治にかけての活躍について（**光の部分**） 《板書》 ・薩摩藩と長州藩をまとめた ・天皇中心の政治へ国の仕組みを変えた ・江戸城の無血開城　など 上記の内容について簡単に説明を加えた	①以下に述べたように、大半の生徒は西郷の業績に対して、ほとんど知識をもっていなかった。これは教師側の想定内の範囲であったので、今後歴史の時間で学ぶであろう範囲で基礎知識を与えた。

③冊子の「奄美大島での生活」の部分（６行）を指名読みさせた	以下（**陰の部分**） 生徒１名
※「奄美大島」と「沖永良部島」での生活を分けて考えてみる	

④【発問２】「奄美大島での生活」を読んでの感想を聞く	指名して発表

感想の内容は予想の範囲であった。

「西郷自身厳しい環境の中にいながら、島の病人や老人に自分の扶持米を分け与えたこと」に対して、「人としての優しさに感動」「自分は分け与えないだろう」など。

一見、生徒にとって奄美大島への遠島は西郷にとって「罪に問われた」というほどの苦痛には感じられない。

そこで見落としがちな西郷の心理に触れた。

年六石の扶持米が与えられ、島民の味方をしたことから慕われるようになり、島の娘、愛加那との結婚など、確かに生活する面では拘束される点が少なかった。

そこで次のような展開を試みた。

⑤【発問３】薩摩藩の一武士として、西郷はどういうことをしたかったのだろうか 《ヒント》として、 ・君たちが一番したいことは何？ ・遠い島へ流されてそれができる？ 今いっしょに野球をしている仲間はいないよ ・やりたいことができない どんな気持ちになるだろう？ もう一度考えてみよう ・西郷はどういうことをしたかったのだろうか ・遠い島へ流されてそれができる？	生徒Ｃ：野球 生徒Ｃ：できない 生徒Ｃ：いやな・・・くやしいっていうか 生徒Ｄ：薩摩藩で仕事をする 生徒Ｄ：できない

「薩摩藩の武士として国に奉公できない歯がゆさは、西郷にとっては耐えられないほどのものだったろう。そういう点では西郷にとって遠島は大変つらいものだったといえるのではないか。」という点を補足した。これは今後の西郷という人間を作る意味で触れておきたい部分である。

⑥冊子の「沖永良部島での生活」の部分（１３行）を指名読みさせた **⑦【発問４】「沖永良部島での生活」を読んでの感想を聞く**	生徒２名 自分の感想をもとにグループで話し合う （グループは５人程度で６グループとした） グループ代表生徒のまとめと発表

（ウ）【まとめ】

	・流罪になった時、ろくに飲まず食わずの日々を過ごしていたことが印象に残った ・苦しいことがあって、それを乗り越えてきたから、今でも語り継がれる人になった ・厳しい環境にどうして耐えられたのだろう ・西郷が流罪で死ななかったのは自分が達成したい目標があったんじゃないか など

「沖永良部島での生活」は生徒たちにとって少なからず衝撃を与えたようである。教師側の予測としては「西郷への同情」が中心になるだろうと考えていた。もちろんその範囲のものもあったが、「読書や瞑想」の生活に目を止め「西郷のあきらめない姿勢」を評価する感想も出た。これは⑤「薩摩藩の一武士として、西郷はどういうことをしたかったのだろうか」で考えたことが引き出すきっかけになったと思う。また、ある女子生徒は「島津久光」の西郷への仕打ちに対し「藩主としてふさわしくない」という感想を述べた。このような視点の広がりもおもしろい副産物だと思う。以上までで時間がきた。

（2）授業を振り返って

「生き方ノート」を配布し、「考えてみよう１」（西郷はどうして沖永良部島での生活に耐えることができたのか）、「考えてみよう２」（西郷は沖永良部島での生活で何を学んだのだろう）について、それぞれ考え、グループでまとめておくように指示した。

また、「考えてみよう３」（自分の好きな言葉を書いておこう）も書いて次の時間に臨むように指示した。

この時間で学んだり、考えたりしたことをもとに感想文を翌日提出させた。

１年生と２年生を比較してみると、少し進度に差が出て同じ授業展開ではなかった分、感想にも多少の差異が感じられた。

指導案では予定したとおり「考えてみよう１・２」まで進みたかったが、そこまで行き着くには西郷の知識が少なかった。この点については予想できていたので、総合の時間を利用してあらかじめ調べさせておくことで、違う展開にできたと思っている。次回の実践では落としどころから逆算した上で、何を前もって調べるか、さらに綿密な計画を立てたい。

《１年生の感想》で主なものを挙げる。

・どんなに追い込まれても自分の夢をあきらめない、心が強い人だと思った。
・日本を守りたかったのだと思う。
・自分がやりたいことができない気持ちは僕たちの想像をこえているものだと思う。
・いい意味でのあきらめの良さと先のことを考える力には感心する。
・自分がどれだけ危険な時でも、人々のことをまず第一に考えることのできる人。
・人にやさしく、自分に厳しい人。西郷隆盛をもっと知りたくなった。伝記を読もうと思う。
・流罪の西郷の立場を考えると、今の自分の環境に感謝しなければ。
・これからの自分がどうしていくべきかを考えるきっかけになった。

《２年生の感想》で重なるものを割愛し、２，３を挙げる。

・自分の持っている知恵を人に分け与えられる人。
・一つの言葉を背にして恰好よく生きている。

上記の感想は全体の一部を切り取ったもので、ほとんど結論の部分である。それぞれの前後には西郷が自分たちと同年代の頃には、けんかもする同じような少年であった面に驚きをもって触れている。また、二度の流罪についても具体的に知ることができたと述べているものが多かった。

そのような感想から、第１時間目の目標『西郷隆盛の偉業のみならず短所や挫折等について知り、西郷の「生き方」を考える土台を固める』ところまではたどりつけたかと思う。

４．授業実践②【第２時間目・２年Ｂ組】

（１）授業の展開から

（ア）【導入】

前時の「奄美大島・沖永良部島での生活」から感じたことを感想文として提出してあった。その中から３つ紹介した。１つは全体的に共通した感想。あとの２つは本時の展開にからむ内容のものである。

①厳しい環境の生活を乗り切った西郷に対する尊敬の気持ちを述べたもの
　子供のころは自分たちと変わらない人間であったという発見を述べたもの
②子供のときや若い時に苦労をして、後の人生にそれが役立っていることを述べたもの
③西郷が流罪の間に死ななかったのは、自分が達成したい目標があったのではないか
（①は多くの生徒が触れている　②は男子　③は女子の生徒の感想）

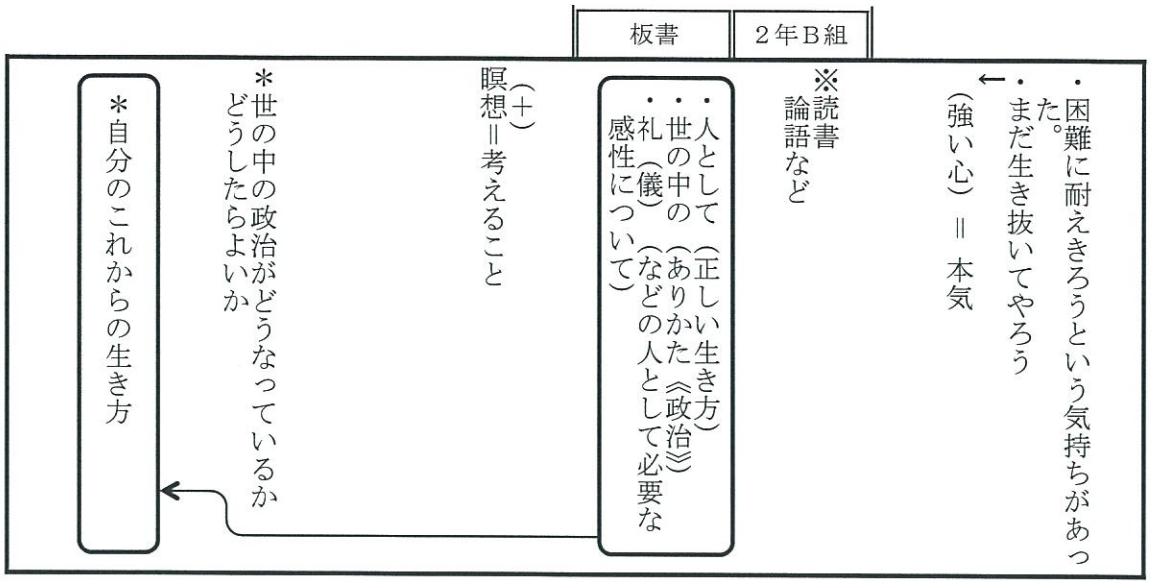
（イ）【展開】

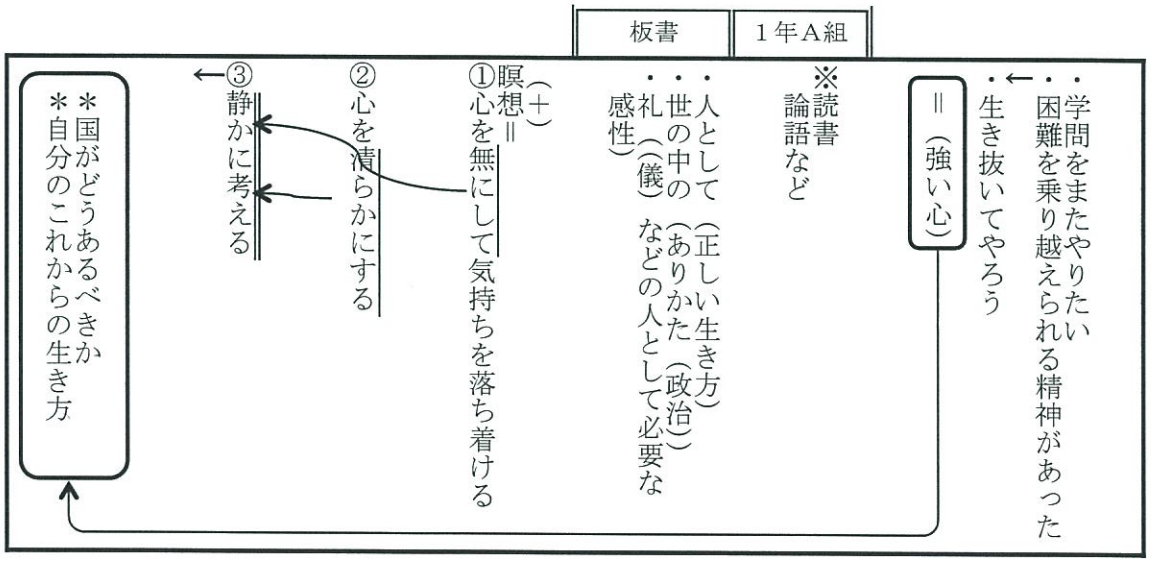
学習活動（教師）	学習活動（生徒）
①**【発問１】西郷隆盛は特に沖永良部島での生活に、どうして耐えられたのだろう**	自分の考えをもとにグループで話し合う （グループは前時と同じにした） グループ代表生徒のまとめ ・困難に耐えきろうという気持ちがあった ・まだ生き抜いてやろう
それぞれの考えには、西郷の「強い心」が共通している **＊「困難に耐えきろうという気持ち」や「生き抜いてやろう」という気持ちは、どこから生まれてきたのだろう**	生徒Ａ：　読書 （参考に西郷の読んだ書籍名を列挙しておいた）
冊子第一部の４ページを開くことを指示 奄美大島・沖永良部島で多くの書物を読んでいる 沖永良部島では、なんと約八百冊もの書物を読んでいる上、そのうちの六巻は百五十枚の紙に書き写している ②**【発問２】その中に「論語」という本があるが、名前を知っているか** ③**【発問３】では、論語をはじめとする多くの書籍にはどのようなことが書かれていたのだろうか**	挙手した生徒１名

（以下をヒントとして《板書》） ・人として（　正しい生き方　） ・世の中の（　あり方・政治　） ・礼（　儀　）	「人として」「礼」は指名する前に生徒から手が挙がったり、答えが出たが、 二つ目の「世の中の（　）」はヒントを出した
礼（儀）は、たとえば「挨拶」などがあげられる 朝「おはよう」という、誰のために言うのだろう	生徒Ｂ：　相手のため
「おはよう」と言われた人はどんな気持ちになるだろう 挨拶にしても礼儀というのは、自分ができるということはもちろん大切であるが、相手が気持ちよくなるということでもわかるように、人間関係がうまくいくために大切なものだ	生徒Ｂ：　気持ちがいい
西郷が読んでいた書籍は「人としての正しい生き方」や「世の中の在り方」や「人の気持ちを察することができる感性を磨く」ものであった	
④【発問４】西郷は、それにもうひとつしていたことがあった	生徒Ｃ：　瞑想
⑤【発問５】「瞑想」って何？	（しばらく考えて）生徒Ｃ：　考えること
⑥【発問６】何を考えたのだろう	生徒Ｄ：　（周囲の生徒と相談） 世の中がどうなっているか
⑦【発問７】どうなっているかなあということだけ？西郷が読んでいた本の内容を思い出してみよう	生徒Ｄ：　世の中をどうしたらいいか
世の中を（日本を）良くしたいということだね **⑧【発問８】そのために大切な、もっと根本になることも、さっきの話に出ていたが**	生徒Ｅ：　自分のこれからの生き方
⑨【発問９】今まで考えてきたことをもとにして「考えてみよう２」へ 遠島という厳しい環境での生活・読書・瞑想などの中から、西郷は結局どういうことを学び得たのだろう	自分の考えをもとにグループで話し合う （グループは前時と同じにした） グループ代表生徒のまとめ
ここまで考えてきた【発問７】【発問８】の答えが、「考えてみよう２」の答えになることに気づく	

（ウ）【まとめ】

西郷は読書から人間として磨かれるものがあった ＊自分の生き方は正しいか ＊世の中は正しく動いているか 西郷自身の使命感とも言える	・自分は何をするべきか ・自分のこれからの生き方





⑩【発問10】「考えてみよう３」 自分の好きな言葉は何か	生徒Ｆ・Ｇ（男子）：　一球同心　・　努力 生徒Ｈ（男子）：　継続は力なり 生徒Ｉ・Ｊ（女子）：　ありがとう　・　絆

⑪【発問11】「西郷南洲翁遺訓」の中で、最も印象に残ったものを挙手	印象に残ったものの番号と人数を板書	
	２５番：　１名	３０番：１４名
	２７番：　１名	３６番：　６名
	２９番：　３名	

《参考》　配布した「西郷南洲翁遺訓」から生徒の印象に残ったものの一部

２５番：「人を相手にせず、天を相手にして・・・・自分の足らないところを反省しよう」

２７番：「まちがった時に改める場合には自分があやまったと思い至ったらそれでいい。非はさっぱり思い捨てて、ただちに踏み出すことだ。・・・」

２９番：「聖人の生き方を踏み行おうとする人は・・・困難やわざわいにあうものだ。・・・」

３０番：「命もいらず、名誉もいらず、地位も金もいらないという人・・・でなければ国家の大きな仕事は成し遂げることはできない」

３６番：「聖人や賢人になろうという志もなく・・・とても私にできることではないというような態度なら戦いに臨んで逃げるより卑怯なことである」

（２）授業を振り返って

第１時間目は西郷隆盛の光の部分と陰の部分、すなわち歴史的な偉業を成し遂げた人物にも普通の少年と変わらない姿や不遇な時代があるのだということを、驚きや新しい発見としてとらえてくれた。

それをふまえて、第２時間目では特に沖永良部島への遠島という過酷な運命の中で、西郷がどのように生き、何をつかんだのかに焦点をあてた。中学１年生や２年生には、やや難解かとも思うことも考えさせてみたが、予想以上の反応もみられ、教師側のモチベーションが逆に高められた。生徒の動きが固まったなと思われた時に、すぐグループでの意見交換に移行した点は効果があったと思う。そこでまとめられた考えが評価されることでグループ全体の活性化がみられた。また、そのあとの個々への発問にも積極的な反応があり、クラス全体の「考えよう」という雰囲気が波紋のように伝わっていく感じを受けた。

生徒たちが考えようという意欲をもって臨むためには、考える材料が必要である。第１時間目で西郷隆盛という人物について名前を知っている程度、第２時間目では論語の名前を知っている生徒が一名という状況で、さあ考えてみようと言ったところで無理な話である。生徒たちの持つ情報量をふまえ、どの程度まで知識を与え、それをつてに考えていくか。準備段階の周到さが重要であることがよく確認できた。

第２時間目の中で最も印象に残った部分は、「西郷が沖永良部島での生活にどうして耐えられたのか」の流れで、「瞑想」の意味を尋ねた時の答えである。板書欄にもあるとおり、１年生と２年生では少し違う答え方をしているが、いずれもおもしろい。特に１年生ははじめに「心を無にして気持ちを落ち着ける」という答えが出た。そこで「心を無にして」という部分をとらえた。『心を無にする』というのは『心の中をからっぽにすること』だという。そこでさらに、『心の中からよけいなものを捨てると心の中はどんな状態になるのかな』と続けてみたところ、「清らかな心」という答えが返ってきた。さらに『清らかな心の状態でどうしたの』と聞いてみた。そこで「考える」という答えまでたどりついた。ここまでくると『清らかな心で考えたことは、決して自分を中心にしたことではない』ということへ理解が進んだ。そこに軸

足を置いて、当時の時代背景や書物から学んだことを振り返ると西郷の心の中が見えてきたのではないかと思う。

そこから話題を【発問10】（指導案では【発問４】）へ持って行った。

【発問10】「考えてみよう３」の「自分の好きな言葉は何か」と尋ねたのは、起承転結でいえば、「転」に当たる。これを最後の時間の第３時間目に生かす伏線にしたつもりである。上記の表にも示したように、「一球同心」「ありがとう」「努力」など、いろいろな言葉が挙がった。

生徒たちそれぞれに好きな言葉、大事にしている言葉がある。西郷にもそれはあった。直前に触れた「西郷南洲翁遺訓」は具体的ないくつかであり、その中心をなすのは「敬天愛人」である。自分の好きな言葉はそれぞれ何らかのきっかけがあって自分のそばに置かれている。たとえば「絆」は『心がつながっていること』『相手を大切にすること』という意味で好きな言葉だという。『相手を大切にすること』という意味で大切にしているところにこの生徒の人柄がうかがえるが、「好き、大切だ」というところからもう一歩踏み込む時間を最終の３時間目に置き、これまでの２時間が１本の線でつながるものとする。

その時生徒たちは一見唐突な【発問10】の意味するところを理解するものと考えた。

余談であるが、これは授業後に担任から聞いた話である。

好きな言葉は「ありがとう」だと答えた女子生徒は２年生であるが、１年生の時は心理的な部分でなかなか開かれないところがあったそうである。この時間、たまたま指名されて答えた「ありがとう」という言葉にも驚きを感じたが、答えたあと他の女子の生徒と目を合わせてにっこりとしていた様子がとてもうれしかったと、担任は語っていた。その様子を見逃さなかった担任に生徒への愛情を感じた瞬間であった。また、今まで気づかなかった女生徒の変化を発見する瞬間ともなった。このことが今後の生徒との関わりの中で生きていけばと願わずにはいられない。

５．授業実践③【第３時間目・２年Ｂ組】

（１）授業の展開から

（ア）【導入】

前時での西郷の遠島で得たことを振り返った。

その上で「西郷隆盛」第二部の「人柄エピソード」をまとめに入ることを伝えた。

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
①【発問１】「人柄エピソード１・２・３」の中で、どんな場面、様子が一番印象に残ったか 指名ではなく、１・２・３のどのエピソードが印象に残ったかを挙手させた	（１）　０人　　（２）　０人 （３）　０人

授業の最初から想定外のことが起こった。「印象に残ったエピソード」について挙手を求めたが、まったく反応がなく、誰一人手を挙げなかったのである。前時の反応のよさから考えると、この一週間の間にクラスで何かがあったことは容易に想像できた。「何か」が何かは分からないが、それならばよけいこの時間のまとめへ集中させたいと思った。

そこで、前時の最後に生徒に尋ねた、印象に残った「西郷南洲遺訓」は

３０番：「命もいらず、名誉もいらず、地位も金もいらないという人・・・でなければ国家の大きな仕事は成し遂げることはできない」

３６番：「聖人や賢人になろうという志もなく・・・とても私にできることではないというような態度なら戦いに臨んで逃げるより卑怯なことである」

であったことを振り返った。この二つだけで、選んだ人数がクラスの三分の二に当たることもあって、前の時間の気持ちを思い起こさせる意図をもってのことである。

よって急きょ「西郷南洲遺訓」の振り返りが導入となったが、「人柄エピソード１・２・３」でそれぞれ印象に残ったものを、グループで出し合い、振り返って「西郷南洲翁遺訓」の内容と重ね合わせてみることを指示した。

（イ）【展開】

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
① **【発問１】西郷隆盛の「人柄エピソード」の、どの場面や様子が印象に残ったか** まず、各グループの中で「どの場面や様子が印象に残ったか」を発表した	グループ討議 4～5名のグループに分かれて、それぞれの考えを出し合う。 代表者のよる発表。

《参考》　配布した西郷隆盛第二部冊子にある三つの「人柄エピソード」のあらすじ

①「降将を辱めず」

決して勝者の威厳を笠に着て、高飛車に出るなよ。彼らを敗者として取り扱うのは、本当の大丈夫のすることではない。敵となり、味方となるのも天命じゃ。庄内藩は剣が折れ、弾が尽きてどうにもならなくなって降伏するのではないのだから、その心中の無念さは察して余りある。

②「万民の上に立つ者は・・・・人々の手本にならなければならない。」

功成り名を遂げると、服装が華美になり、豪壮な邸宅を構えるようになるのは、人間の常だ。ところが西郷は一人沢庵をかじり、竹の皮に包んだ握り飯をほおばる。また、閣議が終わり玄関に出て履物を求めたがあいにく下足番がいない。西郷は足袋のまま退出した。そこに雨が降

り始めたが、濡れそぼったまま庁門にさしかかった。門衛が怪しんで詰問する。西郷は実情を述べるが門衛は信用せず更に詰問する。右大臣の岩倉具視が通りかかって見ると、何と陸軍大将が雨の中に立たされている。岩倉はすぐに門衛に説明して、ようやく釈放された。その帰りの馬車の中で西郷は、門衛を責めるどころか職務に忠実なことを賞賛した。

③「大八車」

ある車引きが大きな荷物を積んだ大八車を引いて坂道を登ろうと難儀しているのを見かけた。それを見た西郷は、陸軍大将の正装をしているのもかまわず走り寄って、大八車を押し始めた。筆頭参議でもあったから、今でいえば総理大臣である。従者があわてて止めてくださいと制止したが、お前も手伝えと真っ赤に力んで懸命に押した。

西郷が作り上げようとしていたのはそんな国だったのだ。

改めて印象に残ったエピソードをまとめることを試みた。結果、自分たちの考えを述べ合ったことでか、今度はスムーズに彼らの印象を知ることができた。

① １人　　② ４人　　③ ２６人

という結果であった。③の内容が最も分かりやすかったせいかもしれないが、①②と答えた生徒がいたことは見逃せない。

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
② **【発問２】西郷隆盛の「人柄エピソード」の行動と「西郷南洲翁遺訓」を重ね合わせてみよう** **それぞれのエピソードに関連した遺訓をさがしてみよう** **そこからどういうことを感じることができるか** **③どういう点でそう考えたのか** ④ 「道義心」という言葉に注目したのはいいね 「道義心」は「人としての道」といえる 西郷は「敵となり、味方となるのも天命じゃ」とも「彼らを敗者として取り扱うのは、本当の大丈夫のすることではない」とも言っている 「心中の無念さを知る」ことも人としての道なのだね	**グループ討議** 4～5名のグループに分かれて、それぞれの考えを出し合う。 代表者のよる発表。 【以下、代表者のよる発表】 生徒Ｋ：①「降将を辱めず」のエピソードは「西郷南洲翁遺訓」３０番の内容と重なると思う 生徒Ｌ：原文の訳の「道義心」とか「恥を知る心」。 勝者の威厳を笠に着て、敗者をバカにしたり差別したりすることは、道義心にはずれるから。
⑤②の「万民の上に立つ者は」のエピソー	生徒Ｍ：②「万民の上に立つ者は」のエピソードも

ドはどうだろう	「西郷南洲翁遺訓」３０番の内容と重なると思う
⑥どういう点でそう考えたのか	生徒Ｎ：②「万民の上に立つ者は」人々の手本にならなければならない 人間は「功成り名を遂げると、服装が華美になり、豪壮な邸宅を構えるようになる」ものだけど、西郷は食べ物も質素だったし、偉そうな態度もなかったから「名誉も地位も金もいらない」という言葉と重なった
⑦では最後の③「大八車」のエピソードはどうだろう	生徒Ｏ：③「大八車」のエピソードも「西郷南洲翁遺訓」３０番の内容と重なると思う
⑧ということは、全部３０番ということになるが、このエピソードはどういう点でそう考えたのか	生徒Ｐ：今で言えば総理大臣の立場で、「陸軍大将の正装をしているのもかまわず走り寄って、大八車を押し始めた」というところから、自分の地位に関係ない行動をとっているし、こういう人でなければ「国家の大きな仕事は成し遂げることはできない」という言葉にあてはまると思うから

※以上の生徒の答えは順次板書した
このあとの⑨⑩を含め以下にまとめる

⑨今のそれぞれの考えをもとに、「生き方ノート（考えてみよう４）」をやってみよう **西郷の３つのエピソードと「西郷南洲翁遺訓」を照らし合わせてみて、西郷の「生き方」をどう思うか**	生徒Ｑ：西郷の言っていることと行動がいっしょということを感じた 生徒Ｒ：いろいろな苦悩があったからこそ、言葉に重みがあると思った 生徒Ｓ：自分の考えを持ち、それをしっかりと実行できる人 生徒Ｔ：人間には上も下もないという考えで行動している 生徒Ｕ：西郷は正しい生き方というのを通してそれを実行に移せるすばらしい人です 人のために自分ができることを考えているのだなと思った

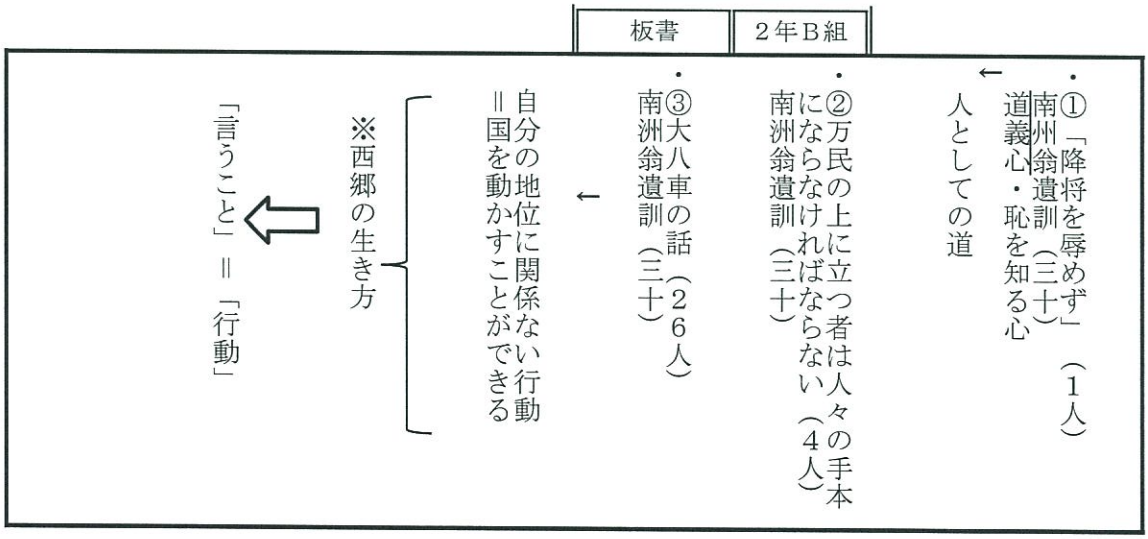
※以上の生徒の答えは簡潔にまとめたものである。実際には、この前後に大八車」などのエピソードの一部を引用しながら答えているのだが、重複するので割愛した

⑩いろいろなとらえ方があった どの考えもそのとおりだなと思えるし、資料には書かれていない部分にも踏み込んで、みんなが考えてくれたと思う **では、少し難しいかもしれないが、西郷隆盛はどういう生き方をした人だったのか、** **西郷の人間像をできるだけまとめると、どういう人だといえるのだろう**	生徒Ｖ：Ｑ君が言った「言っていることと行動がいっしょ」という人だと思う

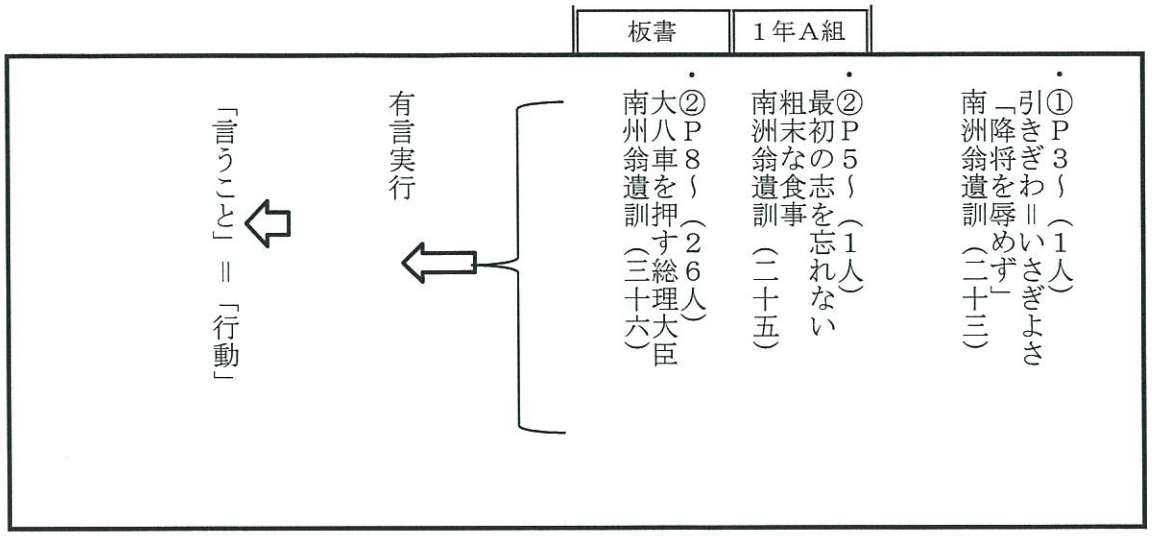
⑪西郷の３つのエピソードはほんの一部でしかないが、それをもとに西郷自身が人に対して言ってきたこと（西郷南洲翁遺訓）と照らし合わせてみた それぞれののグループの発表にあったことと、Ｑ君のいう西郷の人間像・生き方をまとめた　　【板書】	

（ウ）【まとめ】

⑫第２時間目での「考えてみよう３」『自分の好きな言葉』を再度発表する。 その『言葉』に対しての感じ方や考え方に今までと変化が生まれたか、についてこの時間が終わったあとの感想文に盛り込むように指示するに止めた この３時間を振り返る中で、「考えてみよう３」の意味にも触れることが、この授業のポイントの一つである	【課題感想文】 **西郷隆盛の生き方をもとに、自分の感じたことや、自分がこれからどのように生きていこうと思うかをまとめてみましょう** （プリントを配布）



※参考に【１Ａ】の板書も掲載する



（2）授業を振り返って

第２時間目で遠島という過酷な運命の中で、西郷がどのように生き、何をつかんだのかに焦点をあてた。この時間で生徒は、西郷の心の中に使命感があったこと、それが膨大な読書につながり、そこから学んだことから自分の生き方や国の在り方などへと、さらに深く掘り下げていったのではないかというところまで深められたと思う。

それらをもとにして、第３時間目は西郷隆盛の「人柄エピソード」と「西郷南洲翁遺訓」を読み合わせることで、西郷の人柄・人間像をより立体的にみること。そして西郷はさらにどういう「生き方」をしたのかを考えることで、人生のモデルの一つとして生徒がとらえてくれることを最終目標として展開した。

２年生のクラスのスタートは思わぬ落とし穴があったが、グループ活動に切り替えることで、生徒に動きが出て助けられた。

ただ、３つのエピソードの選択には異論のあるところであろう。西郷の人柄を理解する上ではわかりやすいものであったと思っている。が、自分でもある地点へ誘導するように選んだと言われると否定できない。もっと多くのエピソードを収集し、全体の目標にふさわしいものを紹介することは、今後の課題の一つである。

また、「人柄エピソード」と「西郷南洲翁遺訓」を重ね合わせた時に、２年生ではすべて３０番の「命もいらず・・・成し遂げることはできない」に帰着しているという答えであった。これを

１年生は①は２３番、②は２５番、③は３６番と答えている。ちなみにそれぞれ振り返ると、

２３番：「学問を志す者は、理想を高く大きく・・・人としての正しい道を修めなければならない」

２５番：「人を相手にせず、天を相手にして・・・・自分の足らないところを反省しよう」

３６番：「聖人や賢人になろうという志もなく・・・とても私にできることではないというような態度なら戦いに臨んで逃げるより卑怯なことである」

①について理由を２年生は、エピソード本文の前に載せた原文とその訳の言葉に注目して答えている。「道義心や恥を知る心を失っては、国を維持する方法は決してありえない」というのがそれである。そこと「国家の大きな仕事は成し遂げることはできない」という３０番の文とが重なったものである。１年生は「人としての正しい道を修めなければならない」の文に注目したのはよいが、「学問を志す者」についての内容であることを見落とした。その点については授業時に指摘した。しかし、「人としての正しい道」という点は押さえている。

②についても２年生は原文の訳の言葉に注目している。「万民の上に立つ者は、人々の手本にならなければならない」。西郷の②での行為は確かにそれにふさわしいものであろう。粗末な食べ物、自分の地位を笠に着ない、そういう行為が「名誉もいらず、地位も金もいらないという人」に重なったということを、N君は答えていた。１年生が答えた「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、自分の最善を尽くそう。あくまでも自分の足らないところを反省しよう」は、特に前半部が西郷の行為と重なったのである。あるいは「反省」の上での行為であるともとれる。

③については２年生のＰ君が答えた内容のままとらえられる。１年生は「「聖人や賢人になろうという志もなく、昔の立派な人の行いや行ったことを見て、とても私にできることではないというような態度なら戦いに臨んで逃げるより卑怯なことである」を選んだ。「昔の立派な人の行いや行ったことを見て、とても私にできることではないというような態度なら戦いに臨んで逃げるより卑怯」という部分を、難儀して大八車を押す車引きを手伝う姿を「立派な行い」に重ねたのである。

こうして１、２年生の考え方を比べながら、一緒に西郷の生き方を考えてみると、自分自身授業に入る前とはまた違う視点で考えることができた。良い意味でとらえれば焦点があっているか、否か、いずれにせよ生徒たちの柔軟なとらえ方、意外な見方に触れることができたといえる。しかし必ずしもこちらの意図が伝わっているといえないものもある。「どう問いかけるか」「考える時間・話し合う時間」の取り方を含めて、教師側の方法論として受け止めるべきであろう。

残念なのは、時間の関係上、２年生の①②が印象に残った生徒の考えを聞く時間がとれなかったことである。少数の考えを拾い上げてこそ、お互いの考え方や感じ方に触れ視野を広げ、自分の考えを深めるきっかけになる。その機会を作れなかった自分の未熟さを感じさせられた。

ともかく、この３時間の最終目標「西郷隆盛の生き方を巡って、人生のモデルを見つける」に対して、生徒たちは「西郷は自分の中心にある言葉に違わない生き方をした」というところまで考えを巡らせてくれたようである。また、そういう生き方ができた裏打ちとして多くの読

書や思索があり、そこから西郷の哲学が生まれたこと。そしてその哲学が西郷を支えたことも知ることができた。

生徒たちは授業後の感想文の中で多くはその点に触れていた。「正しい考え方」を書物や人の話から学び、言葉と行いができる限り一致することが人からの信頼を得ることにつながることにもほとんどの生徒が行き着いた。頭では分かっていることであっても、一人の人間を通して改めて見つめ直すことは、決して無駄なことではないと思う。と同時に、直接のつながりのないように思える「自分の好きな言葉・大切にしている言葉」の見方が変わったことも、この授業の成果の一つとできる。すでに彼らにとって（全員とは言わないが）その言葉は単なる飾り物ではなくなっていると感じている。自分の生き方にふさわしい、あるいは、好きな言葉を見つけ、いつも自分のそばに置いておく。

もし、彼らが２年後、５年後、１０年後、自分のそばに置く言葉いわゆる「座右の銘」が変わっていくとしたら、むしろ喜ばしいことである。なぜなら、それは彼らの人間としての確かな成長の証しであるからである。

今後、担任がこの授業を生徒に振り返らせることで、彼らが自分の生き方の中心になる考えを持ち、そのような姿勢が見られ子どもの口から発せられるようになっていけば、少なからず生徒たちの手助けになれたことになる。また、そういう意味での担任と連携した継続的な道徳教育を目指していきたいとも考えている。

６．（ア）今後の課題と（イ）まとめ

（ア）今後の課題　①「手作り冊子」について

取り上げた人物に対する知識量は中学生といってもかなり少ないことを感じた。今回の西郷を取り扱う上でも、第１時間目の導入部でもそれは明らかである。それをふまえて、資料をどこまで準備するか、テーマをどこに置くかによって、内容と範囲は決まるだろうが、

(a)その中に生徒たちが調べてまとめる部分・余白を用意しておくことも一つの方法と考える。

(b)それに付随して、グループごとの調査テーマの発表の場を設定することはもちろんである。

(c)それぞれの部分部分が合わさって、より立体的な人間像ができ上がる授業構成にしていかなければならない。

(d)さらにグループ内での協力の上に協議・発見・友情・尊重・自立などの道徳的資質が助長されることも期待される。

(e)また、各グループの発表によって立体化される段階では、一人の人物像をそれぞれの捉え方で自分と重ねるであろう。そこから「人生のモデル」として、より具体化される。

以上の点を考慮し追求する活動と資料作成でなければならない。

今後の課題　②「授業展開」から

この時間の授業展開の課題として残るのは、「発問の仕方の工夫が必要である」と感じたことである。できるだけやさしい言葉で、わかりやすく伝えたつもりであるが、問いかける内容が難しいものもあったと思う。生徒たちが考える意欲を持てないような問い方には充分な配慮が必要だと思う。その点での反省は多々ある。どういう問いかけをもって意欲的に取り組ませるか。これは①での反省である「資料」の扱いと合わせて工夫を重ねたい。

今後の課題　③「アンケートの分析」から

アンケートのグラフは約３％が１人に当たる。

２年生男子は各項目（１）～（８）とも評価は①～④まで、幅広いという特徴がみられる。ただ自分に都合よく見ればおおむね①②のプラス評価であった。女子は（１）～（８）すべて①の評価はない。特に（７）においては大半が②の評価におさまっており、全体を通しても強い関心は感じられない。そこから考えるに、

(a)偉人として選んだ人物が男性であり、女子の生き方と重なる部分が少なかったせいと思われる。どんな生き方、考え方をしたかという事実・行動は理解できても、それを女性ならどんな生き方につながるかという点に発展させることが、もっと明確にできていれば違う結果が出たかもしれない。これは授業展開の上でも大きな課題として残るものである。

(b)次回の試みとして女性を扱ってみたいと思う。

今回の女子のアンケート結果から短絡的に試みようということではない。女子生徒の興味関心度を測ることを目的とするのではないことは言うまでもない。また、アンケートの結果が単に男女逆になるようでは今回の授業の反省を生かしたことにはならない。性別に関係なく、焦点をしっかりと絞った見方、考え方、捉え方ができる授業展開を行なう上で、一つの大きなヒントをもらったと思っている。

１年生の男女別の傾向はどちらかと言えば、男子の興味関心度の方が高いが、２年生女子と１年生女子には大きな差が見られる。男子は女子ほどではないが、多少の差が見られる。この理由は安易に結論づけられない。授業実践の様子でもうかがえるような想定外のクラス内の雰囲気もあり、授業者の方に問題があると考えている。生徒たちはいつも同じ状態ではない。その中でいかに授業の目標に近づく指導や展開ができるかが問われたのである。その点から言えることは、授業者の人間としての器、人格を問われたともいえよう。さらなる自己研鑽・精進以外あるまい。

最後にアンケートを行い、「偉人に学ぶ生き方」の授業が生徒たちにどの程度興味関心を呼び起こし、自分と重ね合わせ一つの生き方のモデルとしてとらえてくれたかを調査集計した。アンケートの質問事項は８項目とし、プラスかマイナスかの４択にした。中間色が入る５択よ

りはっきりと結果が出るからである。また、学年と性別のみで氏名は無記名とした。質問事項は以下のとおりである。

（１）西郷隆盛を通しての授業に興味や関心がもてましたか。

（２）西郷隆盛の授業で、先生の問いかけに真剣に考えることができましたか。

（３）授業の流れが適切で、考える意欲がわきましたか。

（４）資料は「生き方」を考える上で有効でしたか。

（５）この授業で、自分を支える言葉は大切だと感じましたか。

（６）この授業を受けて、自分の考え方や行動を変えようと思うようになりましたか。

（７）西郷隆盛を通しての授業は、新しい発見があったり、自分の考えを深めるのに役立ちましたか。

（８）また偉人の生き方から学んでみたいと思いますか。

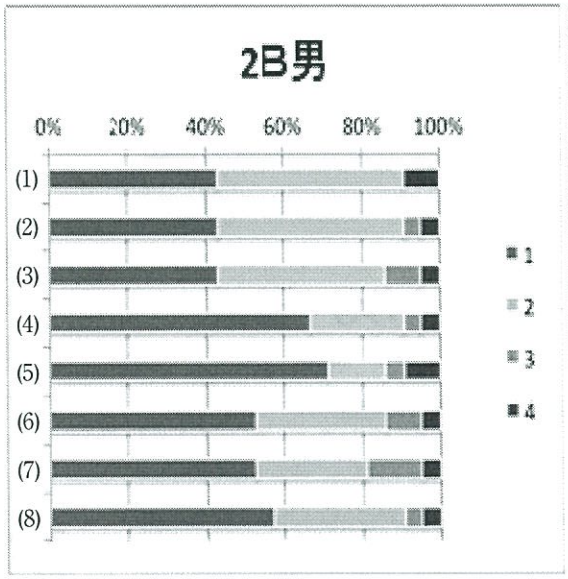
解答の選択の仕方は以下のとおりである。

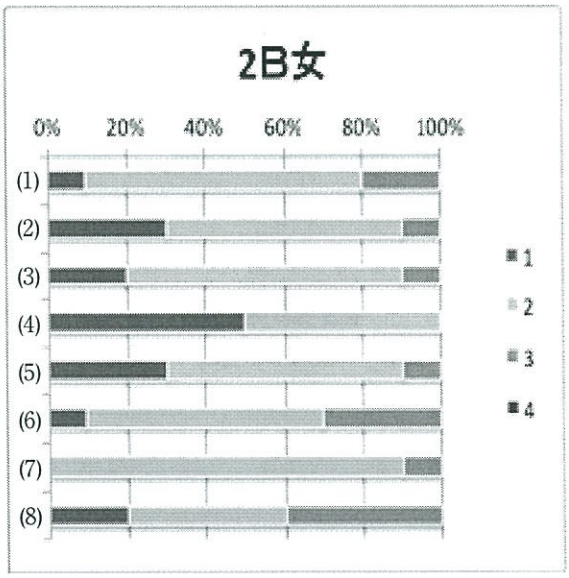
① とても関心が持てた（できた・感じた・思う）

② まあまあ関心が持てた（できた・感じた・思う）

③ あまり関心が持てなかった（できなかった・感じなかった・思わなかった）

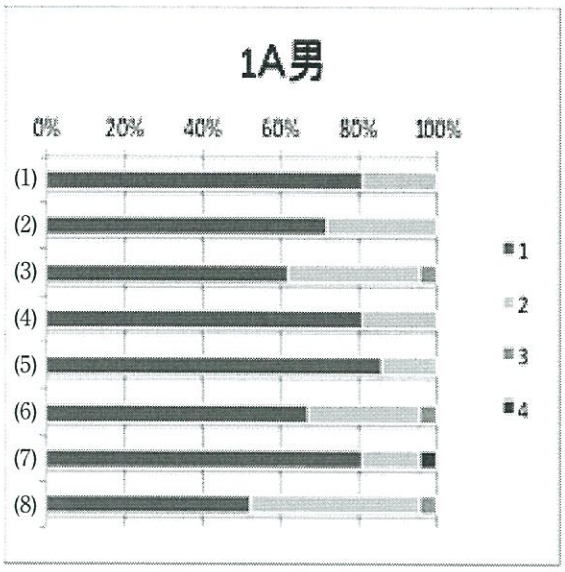
④ まったく関心が持てなかった（できなかった・感じなかった・思わなかった）

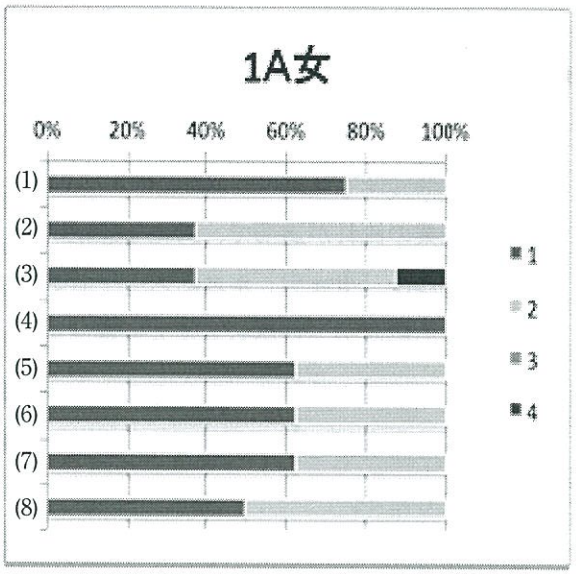


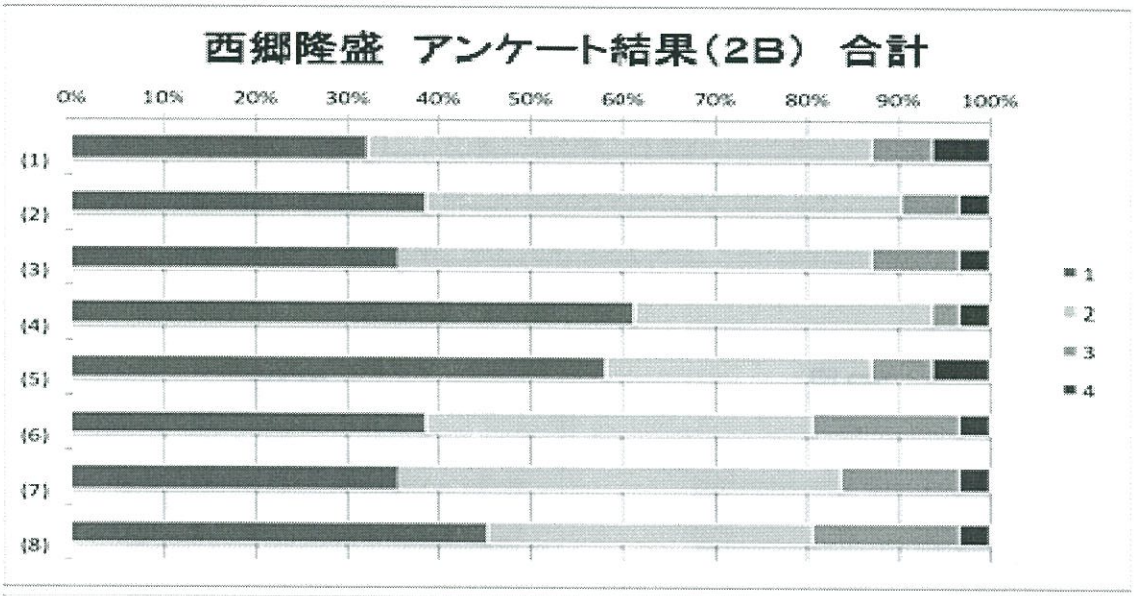


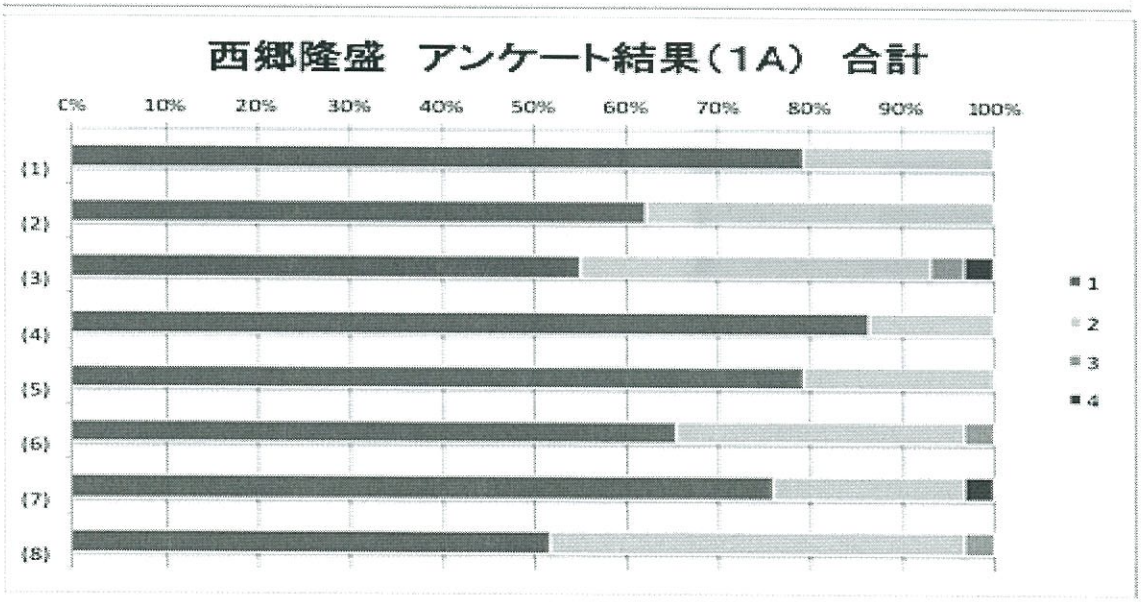
２年生男子に１名、全項目④の生徒がいた。

①②のパーセントは高いが、男子より女子の方が②の割合が高い。（６）（８）は女子の否定的な回答率が 30%～40%と高い。


1A男
0%
20%
40%
60%
80%
100%
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
1
2
3
4


1A女
0%
20%
40%
60%
80%
100%
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
1
2
3
4


西郷隆盛 アンケート結果（2B） 合計
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
1
2
3
4


西郷隆盛 アンケート結果（1A） 合計
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
1
2
3
4

１年生は男子（７）、女子（３）の質問に対して③はなく、いきなり④が１人～２人いる。

１年生と２年生の授業の感触がそのままアンケートに表れているように感じる。安易な結論は出せないが、前述したとおり、生徒たちがこのような授業に興味関心を持つには、考える・まとめる（書く）・話し合うなどの活動のほかに、少人数グループで「調べる・まとめる・発表する」という部分が必要であることを痛感している。

今回１年生と２年生という学年差をつけて試みたが、この授業だけに関していえば質問によってそれぞれ教師の想定以上の考えが出ることもあり、年齢差はあまり関係ないように感じた。クラスのもつ雰囲気も影響する場合もあり、特に道徳の授業では生徒たちの良さを引き出す授業者の力量が問われる。今回のような「偉人の生き方」を通して生徒自身に重ね合わせ、さらに将来に目を向かせる授業は、「誰の」「どこに」焦点を絞るか。その目標にたどりつくための情報を「どこに求めるか（生徒が何を調べるか）」。そのための教師自身の幅広く深い研究がなされなければならない。その点が浅いと単なる偉人、単なる英雄だけで終わってしまう。「その人」が生徒のこれからの人生の道筋を示す灯りとなるような授業を求め、さらなる研究・創意・工夫を重ねる決意を新たにするきっかけになった。

（イ）まとめ

「人生のモデル」の授業展開とし得たか

今回の実践では「偉人」は生まれた時から特別な人間だったのではない。自分たちと同じ成長のしかたをしている、という点に注目させた上で行うことに配慮したつもりである。自分たちとは別世界の人間だというイメージを持った時点で、この授業の目標は崩壊するという危機感を持っていたからである。

むしろ、同じ成長をしながらも、どこで偉人たりうるきっかけがあったか。そこで何を考え、何を行なったのか、偉人の偉人たるゆえんに目を向けさせたかった。ただ、その考え方や行動が、自分にはできない、無理だという方向ではなく、小さなことに目を向け、そのことを大切にし実行していくことが、大きな仕事につながっていくことに気づく。そして、これくらいなら自分にもできるという自分への希望・意欲へ向かうことを期待した。逆にいえば、自分への希望・意欲は「人生のモデル」なくして湧き上がることはない。

以上のような考えのもとに目標として設定したわけであるが、「人生のモデル」の授業展開とし得たかと問われれば、感想文から判断すればきっかけにはなったかと思う。

道徳教育は道徳の時間のみならず、言うまでもなくあらゆる教科、学校行事などを通して行なわれるものである。今回行った授業はそういう点では他教科、他行事とのつながりは薄い。ましてやただ一度の単発の授業でできることとは思っていない。通年でさまざまな偉人の生き方に触れる必要もあるし、担任の毎日の指導との連携も必要であると思う。

今回「偉人の生き方に学ぶ」内容を試みたが、その他の方法として「論語」「小学」等を教材とすることも模索している。これは中学や高等学校における古典の授業のような内容の解釈ではなく、現在の生活に即したものとして扱われねばならない。

今後さらに実践を繰り返し発信することが、意欲的に道徳の授業に取り組む教師の参考の種になれば幸甚である。生徒たちの豊かな人生と幸せを祈りつつまとめとしたい。

《参考文献》（以下の参考文献は生徒用資料に使用した）

文部科学省中学校学習指導要領解説「道徳編」		（文部科学省）	（2012 年四版）
文部科学省道徳用読み物資料（中学校）		（文部科学省）	（2012 年）
日本の偉人１００人（上）		（致知出版）	（2012 年）
西郷隆盛人間学	神渡良平著	（致知出版）	（2008 年）
南洲翁遺訓の人間学	渡邉五郎三郎著	（致知出版）	（2005 年）
修身の教科書	小池松次著	（サンマーク出版）	（2005 年）
代表的日本人	内村鑑三著	（岩波文庫）	（2001 年）
歴史の群像３	三好徹著	（集英社）	（1985 年）
西郷隆盛の生涯「誕生から斉彬との出会いまで」		（ＳＡＮＮＥＴ）	（2013 年）
西郷隆盛の画像		（ＳＡＮＮＥＴ）	（2013 年）